県立広島大学人間文化学部紀要　6，129-142（2011）

ドロシー・ワーズワスの旅
――『グラスミア日記』が終わるまで

天　野　みゆき

Dorothy Wordsworth（1771－1855）は生涯を通して旅を続けた人であった。湖水地方の北部の町 Cockermouth で生まれ、美しい自然の中で幼少期を過ごした。[1] 二人の兄 Richard（1768－1816）と William（1770－1850）、二人の弟 John（1772－1805）、Christopher（1774－1846）がいた。しかし、1778年に母親が亡くなったとき、6歳の少女ドロシーだけが Yorkshire 西部の Halifax に住む母の従妹に引き取られ、9年もの間、兄弟と一度も会うことなく成長した。ハリファックスこそ、「永遠に我が家だと思うであろう最愛の場所」[2] と信じていたドロシーだったが、1783年に父が亡くなり1787年に、こんどは Penrith の祖父母のもとに引き取られる。ようやく兄弟と再会できた喜びもつかの間、再び迫る別れを前に、ドロシーは、家族と引き裂かれる辛さ、「家庭」がないことの惨めさを手紙で親友 Jane Pollard に訴える。

> 私たち兄弟が話はいつも悲しいものとなり、父がいて家庭（a home）があればどんなに幸せか、という願いで終わります。おおジェイン、あなたがご両親の死を早く体験することがないように祈ります。でも、両親を失う悲しみを経験するまでは、あなたの妹さんたちがどんなに大切な存在であるかを知ることはできないでしょう。あの悲しみを知るまでは！（…）私は、今あなたの家族を支配している家庭の幸せ（domestic happiness）を決して失うことがないよう、心から祈らずにはいられません。（*LWD*, I, 5）

すでにこの手紙からうかがわれるように、両親の死によって失われた家庭の幸せを、ドロシーは兄弟との絆に、さらには最も愛する兄ウィリアムとの生活に求めるようになる。しかし、それを実現するまでの道のりは長く、上記の手紙を書いた翌年の1788年10月には、牧師となった叔父 William Cookson 夫婦とともにイングランド東部の州 Norfolk の Forncett で暮らし始める。1789年の夏、ウィリアムと再会し、共に「我が家」を持つことを誓いながらも、[3] それを実現できたのは実に10年後の1799年、Grasmere の家を得たときであった。

このようにドロシーは幼くして母を亡くして以来、住む場所、共に暮らす人が幾度か変わり、最愛の兄ウィリアムと暮らし始めてからも、何度も国内外を旅した。グラスミアの家にいても、かなりの距離を散策し、親交のあった Samuel Tayler Coleridge（1772－1834）の住む Keswick を往復する日々であり、日常の中に旅があったと言える。その旅の記録として *Journal of Visit to Hamburgh and of Journey from Hamburgh to Goslar*（1798）, *The Grasmere Journal*（1800-03）, *Recollections of a Tour Made in Scotland*（1803）, *Excursion on the Banks of Ullswater*（1805）, *Excursion up Scawfell Pike*（1818）, *Journal of a Tour of the Continent*（1820）, *Journal of My Second Tour in Scotland*（1822）, *Journal of a Tour in the Isle of Man*（1828）等を残している（括弧内は執筆の年）。ドロシーの文学的才能は身内や友人たちの間では十分認められていたものの、本人は作家になることなど全く考えていなかったし、嫌悪感すら示していたため、生前に活字になったのは、ウィリアムが自分の詩の覚書や *Guide to the Lakes* に引用したものだけである（Selincourt, 1959, preface, v）。ドロシーの日記と

手紙の編者 E・ド・セリンコートは「一般読者を対象とはしなかった、最も非凡で卓越したイギリスの作家であろう」(1959, preface, v) と彼女を評する。本稿では、ドロシーが念願の我が家で記した『グラスミア日記』に焦点をあて、そこに見出される美意識とアイデンティティを明らかにしたい。この日記は、兄の結婚という問題に直面した彼女が至福と絶望との葛藤を抱えながら、その葛藤を抑えるため、そして兄を喜ばせるために書いたものである。この日記を理解するには、グラスミアに居を定めるまでのドロシーとウィリアムの軌跡を知ることが不可欠であるので、まず、グラスミアに到るまでの彼らの旅について考察する。

1．グラスミアまでの道のり

ドロシーとウィリアムはどのように絆を深めていったのだろうか。ドロシーは、1793年２月16日、ジェインへの手紙で、彼女を「私の小さな牧師館」に招待する夢を語る。

> I look forward with full confidence to the Happiness of receiving you in my little Parsonage, I hope you will spend at least a year with me. I have laid the particular scheme of happiness for each Season. When I think of Winter I hasten to furnish our little Parlour, I close the Shutters, set out the Tea-table, brighten the Fire. When our Refreshment is ended I produce our Work, and William brings his book to our Table and contributes at once to our Instruction and amusement, and at Intervals we lay aside the Book and each hazard our observations upon what has been read without the fear of Ridicule or Censure. We talk over past days, we do not sigh for any Pleasures beyond our humble Habitaion "The central point of all our joys". (*LWD*, I, 87-88)

質素であっても、季節ごとに配慮した居心地のよい部屋で、心が通い合う兄、そして友と互いの想いを心おきなく語り、共有する思い出をなつかしむことのできる家こそ、ドロシーの理想であり、彼女が何よりも望んだものだった。ウィリアムがフランスから帰国したことで、彼女の計画はかなり具体的で確信に満ちている。「全ての喜びの中心」という言葉は、この年の１月29日に出版されたばかりのウィリアムの詩、*Descriptive Sketches* からの引用であり（*LWD*, I, 88n２,４)、彼女はこの言葉を使うことでウィリアムとの一体感を表現している。

この手紙は、ドロシーのウィリアムへの溢れる想いと同時に、優れた鑑識眼を示している点で非常に興味深い。上記引用文よりも前の箇所で、彼女は最近一緒に休暇を過ごした弟のクリストファーの資質について語っているのだが、始終ウィリアムと比較し、ウィリアムの方がいかに優れているかを言わずにはいられない。

> He [Christopher] is like William: he has the same traits in his Character but less highly touched, he is not so ardent in any of his pursuits but is yet more particularly attached to the same Pursuits which have so irresistible an Influence over William, which deprive him of the Power of chaining his attention to others discordant to his feeling. (*LWD*, I, 87)

ウィリアムと似ていながら彼ほどには感動することもなく、情熱的でもないクリストファーについて

述べつつ、ドロシーの関心はついウィリアムのほうに移り、彼が自分の目指すことだけに情熱を傾ける激しい性格であることを語っている。また、クリストファーは「愛情においてぐらつかず、誠実」であると言いながら、「ウィリアムはこれら両方の美点において抜きんでています」（*LWD*, I, 87）と付け加えるという具合である。

その一方で、手紙の後半、ドロシーはウィリアムの『叙景小品』および *An Evening Walk* について、すでに厳しい批判を受けていることを認めた上で、彼女自身の評価を述べる。これらの詩は「詩人の目」（*LWD*, I, 89）でとらえた情景描写であり、多くの美しい表現を含みながら欠点も多いとし、その欠点を次のように分析する。

> ... they also contain many Faults, the chief of which are Obscurity, and a too frequent use of some particular expressions and uncommon words for instance *moveless,* which he applies in a sense if not new, at least different from its ordinary one; by moveless when applied to the Swan he means that sort of motion which is smooth without agitation; it is a very beautiful epithet but ought to have been cautiously used, he ought at any rate only to have hazarded it once, instead of which it occurs three or four times. The word *viewless,* also, is introduced far too often.... (*LWD*, I, 89)

ドロシーはウィリアム独特の語法を十分理解した上で批判しており、後でウィリアムも同意見であることにも言及している。そして実際に、二つの詩において六カ所の "viewless" が後の版では削除されるのである（*LWD*, I, 88n 3）。批評家としてのドロシーは、自信に満ちた口調で、「これらの欠点は若い詩人が陥りがちなものですが（…）彼が二度とは陥らない欠点です。なぜなら、彼は私が話した欠点が修正されていたならば、はるかに良い評価を得ることができただろうことに気づいているからです」（*LWD*, I, 89）と述べる。さらに、クリストファーとともに詩を一行一行分析してかなりの批評を書きためたので、それにクリストファーがケンブリッジ大学の友人たちの意見を加えて、ウィリアムに送る予定だと言う。ウィリアムが詩人として成功するために役立つことは、ドロシーにとって共に家を持つことと同様、否、それ以上に重要な人生の目的であり、生きがいであったのだ。

ウィリアムの『夕べの散策』は、1789年の夏、二人がフォーンセットの叔父の牧師館で過ごしたときに作られたものであり、「イングランド北部の湖から若き女性に送る書簡体詩」という副題がつけられている。このドロシーに宛てた詩で、彼は二人の誓いを明確に示している。

> Thus Hope, first pouring from her blessed horn
> Her dawn, far lovelier than the Moon's own morn;
> 'Till higher mounted, strives in vain to chear
> The weary hills, impervious, black'ning near;
> —Yet does she still, undaunted, throw the while
> On darling spots remote her tempting smile.
> —Ev'n now she decks for me a distant scene,
> (For dark and broad the gulph of time between)
> Gilding that cottage with her fondest ray,
> (Sole bourn, sole wish, sole object of my way;
> How fair its lawn and silvery woods appear!

Where we, my friend, to golden days shall rise,
'Till our small share of hardly-paining sighs
(For sighs will ever trouble human breath)
Creep hushed into the tranquil breast of Death.[4]

月の光、すなわち希望が、暗闇のかなたにある「あの小屋」を金色に染める美しい情景により、二人の置かれた状況と、未来へのまなざしが描き出されている。「唯一の終着点、唯一の願い、唯一の目的地」である我が家で、死が二人を分かつまで共に生きることを彼らは誓ったのだ。ウィリアムは直面する困難を覚悟の上での強い決意を「わが友」ドロシーに伝えている。後の『グラスミア日記』において月がドロシーの希望と強く結びついているのは、この経験によるものであろう。1802年、4月8日、ドロシーは3日前に見た Silver How頂の北側にかかる月を、ウィリアムがケジックで同時刻に見たことを述べている。また、同年4月12日には、月が通過する雲を黄色く染めながら、大小二つの星を従えて渡っているのを目撃し、翌日、ウィリアムがこのときメアリと別れて一人で馬を進めていたことを知った、と記している。月に従う二つの星は、ドロシーには兄と自分に思えただろう。たとえ離れていても同じ月を、しかも同じ時刻に見ていることは、かつての兄との誓いを思い出させると同時に、今なお心がつながっていることの証として、兄の結婚に怯えるドロシーの慰めになったにちがいない。

Frances Wilson が指摘するように、ドロシーにとって人生の重要な転機となるウィリアムとの旅が四回ある（198）。最初は1794年の湖水地方への旅、二回目は1798年、ウェールズの Wye Valley への旅、三回目は1799年、悲願であったグラスミアの我が家への旅である。四回目は1802年7月から10月に渡る一連の旅――ウィリアムとの結婚を控えた Mary Hutchinson を訪問、ウィリアムのかつての恋人 Annette Vallon と娘 Caroline に会うためフランスに渡航、ウィリアムの結婚式を終えてグラスミアに戻る――である。

1794年のウィリアムとの初めての旅は、まるで駆け落ちのような始まり方であった。ウィリアムが恋人と娘をフランスに残してきたこと、そしてクックソン叔父の牧師館を継ぐのをやめたことをこの叔父は裏切り行為と考え、帰国したウィリアムがフォーンセットの牧師館を訪ねることも、ドロシーがウィリアムに会うことも禁じた。それゆえ手紙だけで互いの思いを伝えていた二人は、ドロシーがハリファックスを訪問するのを利用して再会することを密かに計画し、それを実行した。2月に約3年ぶりの再会を果たし、そのまま4月初めに湖水地方へと旅立ったのである。このときのドロシーの思いを伝える手紙は残っていないが、ウィリアムとの再会を待ち焦がれているときに、ドロシーは秘密の計画をジェインに打ち明ける手紙の中で彼への思いを語っている。ドロシーは自分がウィリアムに対して盲目的であること、「兄の美徳の半分は、私の愛情が創り出したもの（the creation of my Love）」（*LWD*, I, 98）であることを認めたうえで、二人の強い絆を主張する。

> ... he was never tired of comforting his sister, he never left her in anger, he always met her with joy, he preferred her society to every other pleasure, or rather when we were so happy as to be within each other's reach he had no pleasure when we were compelled to be divided. (*LWD*, I, 98)

これを裏づけるものとして、ドロシーはウィリアムからの手紙の一部を書き写す。ウィリアムは「僕たちが僕たちのあの小さな小屋に忍び寄ったときに、僕たちをほとんど一体にするであろうあの共

感（that sympathy which will almost identify us）によって、君が感じる喜びと悲しみのすべてが僕の心に同じような喜びや悲しみ（a similar pleasure or a similar pain）を引き起こすことを僕はどれほど願っているだろうか」（*LWD*, I, 101-02, 下線は引用者）と語っていたのである。ウィリアムが"identify"という言葉を使っていることは注目に値する。彼がドロシーに対して抱く一体感、これこそがドロシー側からの一体感を強め、彼女のアイデンティティ形成に大きな影響を与えたのではないだろうか。

1798年7月10日から13日まで、ドロシーとウィリアムは二度目の重要な旅、ワイ渓谷への旅に出かけた。Bristol からフェリーで Chepstow に上陸、そこからワイ川に沿って Tintern Abbey まで歩いた。3日目にも彼らはワイ川を今度は舟で遡って再びティンターン修道院を訪ねている（山田227）。この経験を歌ったのが、ウィリアムの代表作の一つ、*Lines written a few miles above Tintern Abbey*（以下、『ティンターン修道院』と略記）である。

この詩において、ウィリアムは「この瞬間に／未来に向かう生命と糧があるという／喜ばしい思い」(64-66)[5]を感じる一方で、ドロシーを「かつての自分」とみなし、過去と結びつける。

> ... in thy voice I catch
> The language of my former heart, and read
> My former pleasures in the shooting lights
> Of thy wild eyes. Oh! yet a little while
> May I behold in thee what I was once,
> My dear, dear Sister! And this prayer I make,
> Knowing that Nature never did betray
> The heart that loved her; 'tis her privilege,
> Through all the years of this our life, to lead
> From joy to joy: for she can so inform
> The mind that is within us, so impress
> With quietness and beauty, and so feed
> With lofty thoughts.... (117-29)

ドロシーの「狂おしく燃える瞳」に象徴されるように、彼女はウィリアムが今は失ってしまったもの、すなわち自然が「全て」(76) であり、眼に映るがままの自然を愛していたかつての彼自身なのである。このようなドロシーとともに自然の中で生きることは、自然の「静けさ」や「美しさ」に感動し、「高邁な思想」を獲得できる、喜びに満ちた人生を送ることだ、と彼は確信する。ドロシーを通して過去と現在を結びつけ、非常に楽観的な未来像を展開している。ただし、二人の別れの可能性も覚悟しており、万が一別れを余儀なくされた場合には、このかけがえのない思い出を支えとして生きていくようドロシーに訴える。

> Therefore let the moon
> Shine on thee in thy solitary walk;
> And let the mist mountain-winds be free
> To blow against thee: and, in after years,
> When these wild ecstasies shall be matured

Into a sober pleasure, when thy mind
Shall be a mansion for all lovely forms,
Thy memory be as a dwelling-place
For all sweet sounds and harmonies; Oh! then,
If solitude, or fear, or pain, or grief,
Should be thy portion, with what healing thoughts
Of tender joy wilt thou remember me,
And these my exhortations! Nor, perchance—
If I should be, where I no more can hear
Thy voice, nor catch from thy wild eyes these gleams
Of past existence, wilt thou then forget
That on the banks of this delightful stream
We stood together....
Nor wilt thou then forget,
That after many wanderings, many years
Of absence, these steep woods and lofty cliffs,
And this green pastoral landscape, were to me
More dear, both for themselves and for thy sake. (135-52, 156-60, 下線は引用者)

「現在の熱狂的な喜び」、「あなたの狂おしい瞳」といった言葉から、ウィリアムと共にいるドロシーの激しい喜びがうかがえる。だが、ウィリアムはこうした喜びもやがては「穏やかな喜び」、「やさしい喜び」になると言う。この時点で彼が想定している別れは、先に見た『夕べの散策』と同様、死による別れであろう。しかし、ウィリアムの結婚により二人が一つの別れを経験することを思うとき、この詩は非常に暗示的である。ドロシーにとって、彼の言葉通り過去の思い出だけを支えに生きていくことは極めて困難になるのである。

さて、1799年、愛を深めながら「唯一の目的地」を目指して歩んできたドロシーとウィリアムがついに「グラスミアの我が家」に向かう旅路につく日がやってくる。人生の転機となる三番目の旅である。ドイツから帰国後に7ヶ月半滞在していたハッチンソン家のある Sockburn を12月17日早朝に出発し、ほぼ4日かけてグラスミアの Dove Cottage に到着する。[6] 旅の様子は、ウィリアムがコールリッジに送った手紙（12月24、27日）と、彼が翌年に書いた詩 *Home at Grasmere* から知ることができる。冬の厳しい寒さの中、毎日険しい山道を歩き、一日に21マイルも歩くことがあった。しかし、それでも二人がいかに自然の厳しい表情を楽しみ、近づく我が家での至福を感じていたかを、ウィリアムは詩に歌う。

Stern was the face of nature; we rejoiced
In that stern countenance, for our souls had there
A feeling of their strength. (227-29)

A pair seceding from the common world,
Might in that hallowed spot to which our steps
Were tending, in that individual nook,

Might even thus early for ourselves secure,
And in the midst of these unhappy times,
A portion of the blessedness which love
And knowledge will, we trust, hereafter give
To all the Vales of earth and all mankind. (249-56)

悲願達成から生じる高揚感の中、自然の厳しさがむしろ彼らに力を与えた。幸福を手にすることが許されたことに感謝し、全ての人々が幸せになることを願いながら二人は「聖なる場所」にたどり着いたのである。

2．『グラスミア日記』を綴るドロシーの葛藤と美意識、アイデンティティ

ダヴ・コテージでの生活が至福の中で始まったことは疑う余地がない。だが、やがてウィリアムの結婚という問題がドロシーの幸福を脅かす。『グラスミア日記』は、1800年5月14日、メアリ・ハッチンソンを訪ねるために出発したウィリアムと弟ジョンを見送り、悲しみにくれる中で書き始められた。ドロシーはその決意と目的をこう述べている――「私はウィリアムとジョンの帰宅まで、その留守の間の日記を書こうと決心。そして、その決心どおり書き始めている。なぜなら私自身と争いたくないし、ウィリアムが帰宅したとき、この日記で喜ばせることができるだろうから。」[7] 自分の葛藤を押し殺し、兄のために書かれた日記だが、兄に見せることを前提にしていたのであるから、彼に自分の苦しみを理解してもらいたいという願いもこめられていたと言える。

この日記は四冊のノートに綴られたもので、三冊が現存し、上記1800年5月14日から1803年1月16日までの記録になっている。一冊目が終わる1800年12月22日以降、二冊目が始まる1801年10月10日までの日記は失われたノートに記されていたと推測される。[8] 日記は、たいてい天気についての記述で始まり、ウィリアムの体調と詩作の進み具合、訪問客や友人との交流、家事、庭仕事、読んだ本等を記しているが、彼女が一番心にかけているのはもちろんウィリアムである。彼とともに散策し、健康を気遣い、詩を朗読し、語り、詩の清書をする。深い愛情と鋭い鑑識眼で献身的に彼を支える日々がうかがわれる。ウィリアムは散策しながら詩作を行ったし、手紙を受け取るために毎日 Ambleside あるいは Rydal まで歩いていく必要があったので、散策や山歩きは二人にとって最も重要な日常の活動であり、Elizabeth A. Bohls が指摘するように、「美的快」も同様の実践活動であった（170）。

日記を書き始めた日の決意を述べた部分の前に、次のような一節がある。

My heart was so full that I could hardly speak to W when I gave him a farewell kiss. I sate a long time upon a stone at the margin of the lake, & after a flood of tears my heart was easier. The lake looked to me I knew not why dull and melancholy, the weltering on the shores seemed a heavy sound. I walked as long as I could amongst the stones of the shore. The wood rich in flowers. A beautiful yellow, palish yellow flower, that looked thick round & double, & smelt very sweet — I supposed it was a ranunculus — Crowfoot, the grassy-leaved Rabbit-toothed white flower, strawberries, Geranium — scentless violet, anemones two kinds, orchises, primroses. The hackberry very beautiful as a low shrub. The crab coming out.... The valley very green, many sweet views up to Rydale head when I could juggle away the

> fine houses, but they disturbed me even more than when I have been happier — one beautiful view of the Bridge, without Sir Michaels. Sate down very often, tho' it was cold. (1)

これは、ウィリアムへの想い、風景の見方、色彩に対する感受性、花や植物に関する豊富な知識等を示している点で、この日記における典型的な記述と言える。彼女は、風景に自分の心情を重ねたり、風景を描写することで自分の気持ちを表現したりする。ここで、湖が陰鬱に見えることについて「なぜだかわからない」と言っているが、ウィリアムをメアリのところに送り出した彼女の悲しみと苦しみのせいであるのは明らかである。また、目障りな家を消せば甘美であろう風景が多くあるとして、ピクチャレスクの概念にそった見方を示している。William Gilpin が絵を描く際には構図を最も重視し、木々を隠したり、藪を書き加えたりして調整するよう主張したこと(28-29)を想起させる。ドロシーは1801年11月30日の日記にも、丘の上の家のゲートを覆っていた木について「Loughrigg Tarnの山上池とウィンダミア湖の額縁の役割を果たしていた」(44) と記しており、風景を絵画的構図として見ていることがわかる。

もう一つ、ドロシーの美意識が顕著に表れた風景描写を見てみよう。1802年1月31日、ウィリアムと一緒に二つの湖をめぐって散歩したときのことである。

> We walked round the two lakes — Grasmere was very soft & Rydale was extremely beautiful from the pasture side. Nab Scar was just tropped by a cloud which cutting it off as high as it could be cut off made the mountain look uncommonly lofty. We sate down a long time in different places. I always love to walk that way because it is the way I first came to Rydale & Grasmere, & because our dear Coleridge did also. There was a rich yellow light on the waters & the Islands were reflected there. Today it was grave & soft but not perfectly calm.... We amused ourselves for a long time in watching the Breezes some as if they came from the bottom of the lake spread in a circle, brushing along the surface of the water, & growing more delicate, as it were thinner & of a *paler* colour till they died away — other spread out like a peacocks tail, & some went right forward this way & that in all directions. The lake was still where these breezes were not, but they made it all alive. (60-61)

鋭い観察力によって湖の風景、湖面を照らす黄色い光、そこに映し出される島々、そよ風が水面に作り出す動きが色彩豊かに描き出されている。特に島々を映し出す湖面は、「暗い鏡」(19)、「薄暗い鏡」(28) として日記の中で何度も言及され、「黄や青や灰色の空の色を美しく反射」(14) する様子も描写される。これは、ウィリアムの『湖水地方案内』(1835)[9] における「水面は景観の変化に富んだ美しさや輝きを、あますことなく映し出す」(44)、「湖は雲や光、空や周囲の丘陵の姿を映すとともに、大気の変化や微風の動きを目に見えるものにして表してくれるが、風によってしか乱れない」(48-49)[10] という記述に通じる。また、ドロシーが、ウィリアムとの思い出やコールリッジとの関係によって、目の前の風景にいっそうの愛着を覚えていることにも注意したい。ドロシーとウィリアムにとって、自然の中に生きることは、自然の中で友人たちとの絆を深め、それを形に留めていくことでもあった。二人は好きな場所に愛する人たちの名前をつけるのが好きで、"John's Grove" (37, 53)、"Saras Gate" (sic) (154)、"Sara's rock" (53) などがある。愛する人たちの存在をいつも身近に感じるためであった。ウィリアムは1799年12月から1800年10月の間に *Poems on the Naming of Place* というタイトルのもと *Lyrical Ballads* (1800) に収録された五編の詩を書いている (Gill, 697n)。

このようにドロシーとウィリアムが共有する美意識が、先に考察した三つの旅で見られた二人の共感および一体感を生み出し、強めていったことは言うまでもない。それは『グラスミア日記』の記述がウィリアムの詩と一致する点にもうかがわれる。例えば、1802年３月14日の日記に、ドロシーはウィリアムが *To a Butterfly* を書いたことを記し、ドロシーは「私たちが蝶を見るといつも感じるあの喜びについて話していたとき、兄はこの詩を書くことを初めて思いついたのだった。私は蝶をよく追いかけたものだが、蝶の羽から粉を払い落とすのが怖くて（I was afraid of brushing the dust off their wings）捕まえられなかったと話した」(78) と述べている。ウィリアムの詩の第二連で、ドロシーの記述とほぼ同じ言葉が見られる。

Oh! Pleasant, pleasant were the days,
The time, when, in our childish plays,
My sister Emmeline and I
Together chased the Butterfly!
A very hunter did I rush
Upon the prey: — with leaps and springs
I followed on from brake to bush;
But She, God love her! feared to brush
The dust from off its wings. (10-18)

ここでは言葉の類似だけでなく、記述の違いにも注目したい。ドロシーが「蝶を見るといつも感じる喜び」と書いて、現在も変わらぬ喜びを記しているのに対して、ウィリアムは妹の過去の姿だけを詩の中に留めている。『ティンターン修道院』においてドロシーを「かつての自分」とみなしたウィリアムが彼女を過去と強く結びつけるのは、ごく自然なことであった。だが、それは、ウィリアムの詩を熟知し、自分の感情を表現するのにも彼の詩を引用するドロシーを過去に縛りつける役割を果たしたと思われる。

その一方で、現在のドロシーがウィリアムとともに心を躍らせる体験もあった。1802年４月15日、Ullswater 湖畔に「数本の水仙」を見かけ、やがてその岸沿いに「水仙の長い帯」(85) があるのを発見した。その様子をドロシーは次のように描写する。

I never saw daffodils so beautiful they grew among the mossy stones about & about them, some rested their heads upon these stones as on a pillow for weariness & the rest tossed & reeled & danced & seemed as if they verily laughed with the wind that blew upon them over the Lake, they looked so gay ever glancing ever changing. (85)

この経験を、ウィリアムは２年後に 'I wandered lonely as a Cloud' に歌う。

When all at once I saw a crowd
A host of dancing Daffodils;
Along the Lake, beneath the trees,
Ten thousand dancing in the breeze.

The waves beside them danced, but they
Outdid the sparkling waves in glee: —
A Poet could not but be gay
In such a laughing company: (3-10)

ドロシーが記した踊る水仙のイメージを湖のさざなみの楽しそうな様子と比較することで、水仙の与える喜びをいっそう効果的に表現しているが、実はこのさざなみのイメージもすでにドロシーが1800年6月2日の日記に「小さな島のまわりの波は、水中から浮かび上がった妖精たちが島をめぐって踊っているように見えた」（7）と書いている。

もう一つ、二人が同じ体験を記したものとして、ウェストミンスター橋から見た光景をあげよう。1802年7月31日の早朝、Charing Cross で Dover 行きの乗合馬車に乗り込んだときのことである。ドロシーはこう記している。

It was a beautiful morning. The City, St pauls, with the River & a multitude of little Boats, made a most beautiful sight as we crossed Westminster Bridge. The houses were not overhung by their cloud of smoke & they were spread out endlessly, yet the sun shone so brightly with such a pure light that there was even something like the purity of one of nature's own grand Spectacles. (123)

ウィリアムの *Composed Upon Westminster Bridge: Sept. 2, 1802* にも同じイメージを見出せる。

Earth has not any thing to shew more fair:
Dull would he be of soul who could pass by
A sight so touching in its majesty:
This City now doth like a garment wear
The beauty of the morning; silent, bare,
Ships, towers, domes, theatres, and temples lie
Open unto the fields, and to the sky;
All bright and glittering in the smokeless air. (1-8)

これは、ドロシーの人生の転機となった四番目の旅での体験である点でも重要である。ウィリアムと二人だけで過ごすために残されたわずかな時間の中での貴重な体験である。二人はウィリアムとの結婚を控えたメアリを訪ねた後、ウィリアムのかつての恋人アネットと娘に会いにフランスに向かうところであった。メアリとの結婚を告げて、アネットと決別するためである。上記二つの引用はロンドンの町が始動する前の美しさを賛美しており、それは新生活を始める前の希望とすがすがしさと重なるものだろう。しかし、少し見方を変えると、ロンドンの美しさは現実――人間の活動やそれが引き起こす汚染――を隠した美しさである。ウィリアムの結婚が過去を捨てることで初めて可能になること、そしてドロシーが新しい生活の中でしだいに絶望に追いやられていくことを思うとき、二人が描き出す美しい光景は一種のアイロニーを帯びてくる。

この四番目の長旅の最後は、ウィリアムとメアリの結婚後、三人で連れ立ってグラスミアに戻る旅であった。その旅で、ドロシーは初めてウィリアムとグラスミアに向かったときのことを思い出さず

にはいられない。「Wensley村を通り過ぎるときには、なつかしい思い出で心がじんとしてきた。橋、小さな桶の口、急斜面の丘、教会、それらは私の脳裏にありありと焼きついていた。それらはかつて、私と兄さんの二人きりになって、落ち着くところとしてグラスミアに私たちの心をすべて向けたとき、初めて目にしたものたちだった」(129)。また、「ウェンズリー谷の風景が、冬に想像したよりは夏どれほど変化に富んでいるかを、観察せずにはいられなかった」としながら、「自然を本当に愛する者にとっては、冬にできる限りの栄光を与えるのは、うれしいことだ。夏は、それ自体栄え、自賛するものなのだから」(130) と述べる。これは、ウィリアムが『湖水地方案内』で「山岳地が視覚的興味深さにおいて他の地層に勝ることがはっきりするのは夏よりも冬である」とし、その理由を「冬は夏以上に色彩が多彩」(46) だと述べているのと比較すると非常に興味深い。ウィリアムは冬の優位性をはっきりと認識しているのに対して、ドロシーは夏の優位性を感じながら、兄と共有する経験が冬であったため、心情的には冬に優位性を感じたいのである。しだいに過去だけを見つめ始める兆しが見える。

以上見てきたように、ドロシーはウィリアムに「かつての自分」と言わしめるほどの感受性と審美眼を持つと同時に、彼への愛情ゆえに彼だけを見つめ、強い一体感を抱き続けて生きた。彼が彼女自身であった、と言っても過言ではないだろう。ドロシーの日記とウィリアムの詩の共通性をみると、ドロシーが敢えて作家になろうとはしなかったことも理解できる。自然の中で共に生きることで兄にインスピレーションを与え、彼の詩作を支え、詩の清書をすることで彼女も詩人の人生を歩むことができたのだ。それは、彼女にとって自身が作家になることよりもはるかに意味のあることだったのである。

しかし、ウィリアムの結婚によって、ドロシーのアイデンティティは脅かされる。兄がいくら変わらぬ愛情を示してくれても、ドロシーにとって、それは以前とは全く異なるものである。ウィリアムとメアリの間にドロシーの入り込めない絆が築かれてゆく。ウィリアムの魂に最も近い存在であることで支えられていたドロシーの魂は、未来の希望を描くことができず、過去を見つめ、過去を彷徨うことしかできなくなる。それに拍車をかけたのは、他ならぬウィリアムだったのではないだろうか。

ウィリアムはいつもドロシーを過去と結びついた存在として描いた。それでも、二人だけで我が家を夢見て歩み、二人だけで暮らしているうちは、ドロシーは未来を考えることができた。しかし、兄夫婦との新しい生活の中で、かつては未来への希望を失わぬよう支えてくれた兄の詩は、彼女を過去の檻に閉じ込める役割を果たしたように思われる。1835年頃から、ドロシーは精神的病に苦しみ始め、やがて正気を失ってゆく。1838年春には姪の Dora に宛てた手紙で「私の思考は混乱しています。」「私は闘い、悩み、生き抜いています」(*LWD*, II, 930) と葛藤に苛まれる苦しみを吐露している。苦難を乗り越えてようやく手に入れた幸福がしだいに脅かされ、やがて絶望へと変わっていったグラスミア以後も、彼女の旅は続く。それはどのような旅なのか、また『グラスミア日記』に見出される美意識とアイデンティティはどのような変化を見せるのか。それについては稿を改めて論じたい。

注

本稿は平成21－22年度科学研究費補助金による研究（基盤研究（C)、課題番号21520275)「18－19世紀イギリスの旅行記に見られる美意識とアイデンティティに関する研究」の成果の一部である。

[1] ドロシー・ワーズワスとウィリアム・ワーズワスの伝記的事柄については、山田および Wilson を参照した。

[2] *The Letters of William and Dorothy Wordsworth,* I, 15. 以下、*LWD* と略記し、本文中に巻数と頁数を記す。

[3] 手紙や日記は残されていないが、この年の再会直後に完成された *An Evening Walk* の407－22行で知ることができる。Gill ed., *William Wordsworth.*

[4] William Wordsworth, *An Evening Walk,* 407-22. *William Wordsworth,* ed. Stephen Gill. 以下、本稿におけるワーズワスの引用は本書により、引用末尾に行数を記す。

[5] 詩の訳は、山内編、『対訳ワーズワス詩集』を参考にした。

[6] この呼び名は後世つけられたもので、当時は "Town End" という住所を示す名前がついていただけだが（山田 303)、本稿では便宜上この呼び名を用いる。

[7] Dorothy Wordsworth, *The Grasmere and Alfoxden Journals* 1. 以下、『グラスミア日記』からの引用は末尾に頁数を記す。日本語の訳は、藤井訳を参考にした。

[8] 日記が記されたノートに関する詳細は、Pamela Woof, notes, *The Grasmere and Alfoxden Journals, by* Dorothy Wordsworth 159-60, 196-98, 221-22を参照。

[9] 通常『湖水地方案内』と呼ばれているものは、この本の初版に位置づけられる『選り抜きの光景』(1810) から数えて第五版になる。小田、訳者解説 202。『選り抜きの光景』の原題は *Select Views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire* であり、著者は Rev. Joseph Wilkinson とされた本書の中で、ワーズワスの文章は「序」として匿名で掲載された。Ernest de Sélincourt, introduction, *Guide to the Lakes,* by William Wordsworth, ix.

[10] 日本語の訳は小田を参考にした。

引用文献

Gill, Stephen, ed. *William Wordsworth.* The Oxford Authors. 1984; Oxford, New York: Oxford UP, 1989.

Selincourt, Ernest de, ed. *Journal of Dorothy Wordsworth.* Vol. 1. London: Macmillan, 1959.

—, arr. and ed. Shester L. Shaver, rev. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth.* 8 vols. 2nd ed. Oxford: Clarendon, 1967-93.

Bohls, Elizabeth A. *Women Travel Writers and Language of Aesthetics, 1716-1818.* 1995. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

Gilpin, William. *Three Essays on Picturesque Beauty; on Picturesque Travel; and on Sketching*

Landscape: to which is added a Poem, on Landscape Painting. 2nd ed. 1794. *The Picturesque: Literary Sources & Documents.* Vol. 2. Ed. Malcolm Andrews. Mountfield: Helm Information, 1994. 5-60.

Wilson, Frances. *The Ballad of Dorothy Wordsworth.* 2008. London: faber and faber, 2009.

Wordsworth, Dorothy. *The Grasmere and Alfoxden Journals.* Ed. Pamela Woof. Oxford World's Classics. 2002. Oxford: Oxford UP, 2008.

Wordsworth, William. *Guide to the Lakes.* Ed. Ernest de Sélincourt. 1906. London: Frances Lincoln, 2004.

山田豊『ワーズワスと妹ドロシー ――「グラスミアの我が家」への道』音羽書房鶴見書店, 2008

ワーズワス, ウィリアム. 山内久明編, イギリス詩人選（3）『対訳ワーズワス詩集』岩波書店, 1998

――. 『湖水地方案内』小田友弥訳. 法政大学出版局, 2010

ワーズワス, ドロシー. 『ドロシー・ワーズワスの日記 1798, 1800-1803』藤井綏子訳. メアリ・ムアマン編. 海鳥社, 1989

The Journey of Dorothy Wordsworth: Until the Termination of *The Grasmere Journal*

Miyuki AMANO

Abstract

Dorothy Wordsworth continued to be a traveler all her life. The present essays examines Dorothy Wordsworth's sense of beauty and sense of identity through her journey from her adolescence until the termination of the *Grasmere Journal.* Losing their parents when young, Dorothy and William Wordsworth yearned to establish their own home, and were able to realize this ten years later at Grasmere. Their affection deepened so much as to almost completely identify themselves with each other. Dorothy's letters and the *Grasmere Journal* show her passion, acute sensitivity, and critical eye for poetry which gave the inspiration and stimulus to William for writing poems. However, due to William's marriage with Mary Hutchinson, Dorothy was gradually driven to despair. She came to be consumed with memories from the past, and it can be argued that it was William's poems which accelerated this tendency and imprisoned her in her past.